

# DARKSIDE

written by HADEYA

## 1

「染色体異常のくせに」

言っではならない事を言った。大切な人に。大切な人は出て行った。出て行った切り、帰って来ない。すぐに帰るだろうと思った。違った。大切な人は夜になっても帰って来ない。電話にもメールにも応じてくれない。ノゾミ——私は……反省していた。カッとなって言った、他愛ない一言。それが人を傷付ける。分かっているながらの失言だった。大切な人が帰って来ない。朝になっても帰らない。反省は焦燥感へ変わって行く。

私は薄々、勘付いていた。もう大切な人——娘は二度と帰って来ない、と。

## 2

時計を見た。朝9時を過ぎても娘は帰らない。焦燥感が募って行く。私は……失っではならないモノを失った。失って初めて気付いたのだ。失うべきでなかった、と。会って直接、謝罪がしたい。しても無駄なのは分かっているが……。

再び時計を見た。時刻は正午を回っている。今頃、娘はどこで何をしているだろう。自暴自棄になっていないだろうか。良からぬ事をしていないだろうか。考えても無駄なのは分かっている。しかし考えずにいられない。焦燥感はやや沸点に達しつつある。その時、スマートフォンが着信した。嫌な予感の的中した。娘はヘロインのODで救急病棟に運ばれていた。

\*

娘と再会した。一命を取り留める、と医者と言った。しかし娘は帰らぬ人となった。娘は死んだ。誰でもない(私)が殺したに違いなかった。

私は……現実を受け入れた。受け入れざるを得ないからだ。

## 3

深夜になった。娘が遺体安置所へ収容された後、調べを受けた。刑事から「親子関係に異変はありませんでしたか？」と尋ねられた。「なかった」と答えた。自分でも驚くほど自然に嘘が吐いて出た。調べから解放され、安堵感を覚えた。私は……自分のした事に罪恶感を抱いている。罪に目を瞑り、嘘を吐き、事実を隠蔽した。これで良いのだ、と言い聞かせる。私は……自分に対し、言い訳を続けた。

言い逃れは出来ない。分かっている。分かり過ぎるくらい分かっている。けど私は言い逃れを続けた。罪を逃れるのに懸命だった。

歩きながら言い訳を続ける。言い訳する程、楽になる。言い訳する程、苦しくなる。もはや私は完全に自分を見失っている。見失っている事には、とつくに気付いている。

けど自分では、どうにも出来ない。出来ないモノは出来ないのだ。

#### 4

煙草を吸った。数年ぶりに。禁煙を止め、メンソールの白煙を吸い込んだ。久々の煙草は美味しかった。とてもとても美味しかった。

院内での事務手付きを終えた。じっとしていられず……動悸が激しくなり、手が震え……私は自分が崩壊して行くのを感じている。

墮落——墮ちれば墮ちるほど、楽になる。

ワインが飲みたい。ドラッグをキメたい。食い止める必要がある。けれども気付いた時には手遅れ、だ。私はドラッグの売人に電話を入れていた。

私は地の底へ墮ちたのだ。

#### 5

私には前科がある。薬物の不法所持による現行犯逮捕。厳しい入院生活を経て解毒した。禁酒禁煙も行った。しかし依存症は完治しなかった。チョコチョコ、売人に電話を入れていた。エクスタシーを購入する為に。今回はヘロインを購入する。一度、キメてみたいと思っていたからだ。依然、心臓は激しく脈打っている。ブツ飛ばば、現実世界から逃れられると思っている。

**ガシャン!** と、大きな音がして身体がビクッと反応した。付近のガラスが砕ける音だった。野次馬が集まる。私は……〈何か〉を感じた。何を感じたかは分からない。しかしガラスの砕ける音で我に返ったのは事実だ。音が、生々しい音が私を現実世界へ引き戻したのだ。そして諭す——

娘は死んだ。私が殺した。

#### 6

命……生命とは〈驚き〉だ。同時に奇跡でもある。そして奇跡とは天文学的に低い確率の偶然の事だ。しかし何故、そんな確率の低い現象が起こるのか。発生確率の低さは誰が算出すると言うのか。偶然が偶然である理由

.....巨大爆発から宇宙と言うマクロな世界が誕生する理由。果たして、そんな偶然が存在するだろうか。するとすれば、何故、別の偶然に帰結しなかったのか。何故、その偶然が選ばれたのか。

因果。原因と結果は必ず繋がる。その結果が発生しなければ、次の原因へ繋がらない。だとしたら——

真理——偶然などなど存在しない。偶然を選出した〈者〉がいる。それは逆因果論では説明が付かない。

同時に私は走った。病院へ。遺体安置所へ。もしかしたら.....そんな事はありません。分かる、分かっている。分かり過ぎるくらい分かっている！ 奇跡など起こらない。起こる訳がない。しかし信じる事、それは力だ。力は奇跡を起こすかも知れない。娘は蘇るかも知れない。

現に奇跡が起きた。突如、ガラスが砕け、私を現実に戻す奇跡。娘の再誕を信じ、遺体安置所へ母である私が走る奇跡。人生は偶然の連続だ。奇跡の連続であり、それは必然である。そこに私は〈神〉を見る。彼は傍観者でも審判でもない筈だ。それは.....目撃者だ。目撃者は選ばれし者。そして選ばれたのは、私だ。

走り、感情を抑える。今は冷静沈着でいるべき、だ。

走りながら活路を見出すよう試みる。しかし希望が見えない。私は自分が何を望み、何をしたいのかが分からない。

本当は分かっている。何をすれば良いか。何を成し遂げ、何を果たすべきか。

すべき事——それは娘を再誕させる事。自分のした事に対し、責任を取る事だ。

走った——風を切り。全身をバイオパワーが巡る。ふいに電話が鳴った。娘の着メロだった。立ち止まり、慌てて電話に出た。

「.....御免ね、ママ」

娘の声だった。私は伝えた——自分のストレートな想いを。ありったけの想いを込め。

「愛してる！」

叫びながら、その場に泣き崩れた。その声は本当の声.....可能性と言う名の本物の声に他ならなかったからだ。

以来、私は突っ走った。今日まで。全力で走り、自分を取り戻すに至った。

ダークサイドを打ち砕く。右拳で木っ端微塵に。走り続ける——自分の人生を。

この物語を全ての〈落伍者〉に捧げる。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

口座名義 モリカワ ケンタロウ  
三井住友銀行(店番号**232**) 普通口座 口座番号:**7342872**